

戦時下の《1943年夏》を語る

—創価教育学会の弾圧の前後—

高 崎 隆 治

昭和16年——開戦前夜

高崎でございます。配布の年表（次ページを参照）は読めるでしょうか？ 下手な字で急いで書いたものですから、どこか字が間違ってるやしないか心配ですが、昭和16年から18年の主な状況を並べました。本当にお話ししたいのは、実は18年です。けれど、18年のことを突然に説明しても、「その前はどうかだったんだろう？ どうしてこういうことになったんだろう？」となると困るので、太平洋戦争に入る年ということで16年から書きました。

最初に、「近衛メッセージ→米大統領」とありますが、これは当時の総理大臣である近衛文麿が、日本側の考えをアメリカ大統領に伝えた、ということです。それが16年の8月。なぜこのような手紙を渡したかという、この時アメリカと日本の通商条約が廃棄されているわけです。アメリカ側から「通商条約廃棄」という通告があったわけですが、それは「中国の戦場から、日本軍は引き揚げろ」ということを、アメリカ・イギリスが連名で、日本に迫っている。それに対する返事が近衛メッセージです。内容は、「引き揚げるわけにはいかない」というもので、それをアメリカの大統領、当時はルーズベルト、に送ったわけです。アメリカの要求を容れない、認めないという返事ですから、この段階で、アメリカとの戦争は時間の問題、ということになります。

昭和16年、当時の僕は中学校の4年生です（昔の中学は5年までです）。その時に僕が思ったのは、「日本には偉い人が大勢いるはずだから、まさか戦争なんていうことは考えられない。今になんとかうまく妥結されるだろう」ということでした。国民の、おそらく99%は、僕のような考え方であったと思います。ところが、違いました。年表の2行目に「御前会議」とありますね。これは天皇の前で、総理大臣をはじめ、陸海軍のトップクラスが集まった会議です。その内容は、「10月下旬を目標に、戦争準備を万端にする」というものでした。9月6日に決定されたとされています。ところが、国民はそれを知らないわけです。第一、「御前会議」というものがある、なんてことも知らない。したがって、「アメリカとうまくいかないようだけど、なんとかなるんじゃないかな」なんて思っていたわけですが、当時の状況を冷静に見てみると、これは何か危ないぞということが分かります。

Ryuji Takasaki（戦時文学研究家）

*本稿は、創価教育学研究会特別講演会での講演「戦時下の《1943年夏》を語る」（2011年7月13日、於：創価大学）に加筆・訂正をしたものである。

年 表

昭和16年

- ・近衛メッセージ→米大統領（8月）
- ・御前会議「対米英戦争準備」（10月下旬を目途）
- ・大学・専門学校等修業年月短縮（10月）
（16年度三か月・17年度六か月）
- ・対米英戦争決定（御前会議・12月1日）

昭和17年

- ・日本本土初空襲（4.18）ノースアメリカンB25陸上機による
- ・ミッドウェー海戦（6月～）日本側空母4隻沈没（全6隻中）
- ・ソロモン海戦（第一次～三次）8月～11月
（沈没）戦艦2、重巡3、駆12、潜4、輸23、飛千九百機、搭乗員二千名戦没
- ・金属回収令（7月）女学校外国語随意科目（7月）

昭和18年

- ・米英音楽演奏禁止（1月）ガダルカナル島撤退（2月）
- ・連合艦隊司令長官戦死（4月）アッツ島全滅（5月）
- ・未婚女子勤労挺身隊へ動員（9月）
- ・学徒徴兵猶予停止（10月）学徒出陣式（10.21）
- ・マキン島タラワ島の日本軍全滅（11月）
- ・兵役法改正・満20才を19才に改めた。（12月）丙種にも適用。

年表の3つ目を見てください。10月に、「大学・専門学校等修業年月短縮」があります。どのくらい短縮したかということ、昭和16年度の場合は3か月。卒業が本来は3月なのに、前年12月に卒業、となります。翌年は、6か月も早まっています。昭和18年3月に卒業するはずの者を、17年の9月にさせる。この大学・専門学校などの教育修業年限を短縮させたという事実から、「なにか起きるのでは？」と考えるべきですね。ところが、僕は、「中国の戦場で兵隊が足りないから、学生を早く卒業させて、中国の前線に送ろうと考えているのかな」と、安易に考えていました。年表の次の項目は、対米戦争を決定した16年12月1日の御前会議です。12月1日に、「12月8日に開戦をする」という決定を御前会議で行っている。これも僕らはまったく知らないわけです。

開戦当日——5つの予言

その朝、登校しようとして電車に乗ったら、海軍の将校が5人も10人もどやどや乗ってきました。不思議なことに、その全員が日本刀（軍刀）を、紫の袋に入れ持っていたのです。海軍の将

校というのは、平常は短剣を吊っているはずで。それが、その日は、紫の袋に入れた長い日本刀を持っていた。しかも、電車に乗るときにです。「なんだ、これは？」と思いました。私が通っていた中学校は、俗に「海軍学校」と言われていた逗子開成中学（昔の開成二中）という学校です。なんで海軍学校と呼ばれるかという、校長は横須賀海兵団の団長であった人。教員は、30人から40人くらいいる中の十数名が、海軍の元将校。だから、海軍学校と呼ばれていました。海軍将校がたくさん電車に乗っているのは不思議ではないのですが、その日に限って、軍刀を持って乗ってきたわけです。ところが世の中にはおっちょこちょいの人っていて、背広を着た中年男性が、大声で「とうとうやりましたね。アメリカなんて、イチコロでしょう」と、言うのです。海軍の将校たちは、返事をせずに黙っています。「どうですか？ 一週間くらいでケリがつくんじゃないですか？」と男が訊ねても、将校はみんな堅い表情で何も言わない。このとき僕は、「戦争が始まった」と思いました。そして、その変な男は、海軍将校たちが何も言わないものだから、竹刀袋を持っていた僕に、「君は剣道部か。がんばれよ。アメリカなんかには負けるな」と言ってきました。僕は海軍将校にならって相手にしませんでした。

余計なことをいうようですが、その日の夜、僕は親の前で、戦争の見通しを5つ言いました。

「①東京、横浜は焼け野原になる」

「②その前に頭の上に原爆が落ちる」

「③その直前にソビエトが戦争に参加してくる」

「④しかしそうなる前に、俺は戦場のどこかで死んでいる」

「⑤戦争は昭和20年に終わる」

の5つです。当たらなかったのは、④の僕の戦死のみで、あとは全て当たりました。この見通しは、いい加減ではないのです。例を少し挙げます。さっき触れました、教員の海軍将校のなかに、戦艦の機関長がいました。国枝三郎という大佐ですが、その人が開戦の直前に言うには、「日本は軍艦を動かすのに必要な重油を2年分しか持っていない。だから戦えるのは2年間だ。それ以上やると負ける」のだと。僕の計算ですと、「戦争を始めたら何割かの日本の軍艦は沈むから、2年分の備蓄はいくらに残るだろう。だから1年足して、3年間は戦える。17・18・19年の3年間。しかし、昭和20年に日本は負ける」。こういう推理です。それから、「原爆」ですが、当時、『フレッシュマン』という中学生向けの月刊誌がありました。後の英語廃止によって、『新人』と改題されましたけれども、この雑誌の昭和16年の9月号（と記憶していますが）に、原爆のことが書いてありました。残念ながらその号は、僕が兵隊に行っている間に、弟が誰かにあげたので、いま正確な引用が出来ませんが。なんと書いてあったかという、「ロンドンやニューヨークといった、大都市が理論的に一発でふっとぶ爆弾がある」と。更に、「これを発明するのはどこか？ それには条件が2つある。ひとつは世界一の経済力、もうひとつは世界一の頭脳。この2つを持つ国が発明する」のだと。「今度の戦争は（これは、太平洋戦争ではなく、欧州大戦のことです）、どここの国がその原爆を先に作るか？ それで決着がつく」と。僕はこれを読んだ時に、顔色が変わるほどびっくりしました。というのは、「頭脳」の点で当時世界一は、ドイツといわれ「経済」はア

メリカ。となると、その2つの条件でいえば、発明するのはアメリカに決まっています。なぜなら当時の新聞は、ドイツの有名な科学者が次々にアメリカに亡命していることを報道していました。亡命者の名前はみんな忘れてしまいましたけれども、ドイツの科学者の少なくとも10人から20人がアメリカに亡命しています。こうなると、原爆はアメリカが作りますよね。敗戦時、日本人の99.9%が「原爆」のことをまったく知らなかった、といましたが、僕にはそれがいまでも信じられません。当時、中学生だった人間が知っていたのですから。

昭和17年——初の空襲

太平洋戦争が始まり、翌17年に入ると、アメリカのノースアメリカンB25という陸上機が、東京・横浜・神戸あたりに初の空襲をします。日本人も愚かだと思うんですが、ハワイあたりから日本まで爆撃をして帰って行ける飛行機は存在しない。だから、アメリカの長距離爆撃機は日本にこない、と考えていました。軍部もそうなんです。ところが、B25はやって来ました。どうやって来たかというと、航空母艦に積まれて、です。陸上機とは陸上爆撃機の略で、それは陸上の基地から出発するものです。それに対し、艦爆とか艦攻というのは、航空母艦から発進します。日本では、陸上機は航空母艦に絶対に積めない、と言われていましたが、積む数を減らせば、積めるのです。ですから、陸上機による空爆はありうるのです。4月18日に、僕は中学の創立記念日で、家にいました。すると、頭の真上を、高度500メートル位で、東京方面から横浜へ向かって来ました。翼の下には、アメリカ軍のマークがありませんでした（マークが塗りつぶしてあったので）。下から500メートルくらいの距離ですからよく見えしました。それは頭上を通過して、横須賀方面に行ったんですが、横須賀もこれによって爆弾を何発か落とされています。そのことは後でわかったことで、当時は絶対に空襲はないと信じて疑わなかった、ということです。民間人ならともかく、軍人もそうでした。あんまり軍人の悪口言っちゃいけないと思うんですが、僕の女房の父親というのは職業軍人です。

次のところを見てください。「ミッドウェー海戦」が17年6月にあります。ミッドウェーはアメリカの領土で、ちょうど日付変更線のすぐそばです。ここで日本の海軍は総力をあげて、アメリカ海軍と戦いました。戦争が始まる前、アメリカに航空母艦が何隻あったかといいますと、7隻でした。日本は6隻。この時その6隻のうちの4隻で日本側は出動しました。アメリカ側は、7隻のうちの6隻だという説と5隻だという説があります。結果は、日本の航空母艦、4隻全部が沈没です。アメリカはこの時に1隻しか失っていません。アメリカにはまだ残り6隻ありますが、日本にはあと2隻しかない。しかし、この2隻のうちの1隻は、ミッドウェー以前に沈没しています。オーストラリアの近くに珊瑚海という海があり、その珊瑚海で、日本の空母2隻のうち、1隻が沈没し、1隻がかなり傷んでいます。結局、空母6隻のうち、5隻がダメになり、残りは大破した1隻です。アメリカが失ったのは1隻だけ。こういう結果です。年表の昭和17年の「沈没」という項目をご覧ください。戦艦が2隻、一等巡洋艦（重巡）が3隻、駆逐艦が12隻、潜水艦が4隻、輸送船が23隻、空母以外にもこれだけ沈んでいるのです。これでは、もうほとん

ど戦争にはなりません。ここで戦争を止めていたら、原爆は落ちなかった、と僕は思うんです。戦えないはずの状況であった日本は、その時に何をしたのか？ それは同年7月の「金属回収」です。お寺に鐘がありますよね。それから、銅像、あるいは橋の欄干の手すり、そういうものをみんな回収して、軍艦や戦車を作る。女学校では、外国語を随意科目にして、やってもやらなくてもいいようにした。

昭和18年——学徒動員

翌昭和18年に入ると、アメリカやイギリスの音楽は演奏自体が禁止されました。プロだけではありません、アマチュアでもです。アマチュアでも、演奏しているのを聞かれたら、特高に「ちよつと来い」と言われて、ひっぱられます。2月の「ガダルカナル島撤退」（ガダルカナルというのは、ニューギニアの南にあるソロモン諸島の一つです）。これは前年8月からやっていた戦いですが、結局は撤退します。日本軍というのはいいかげんで、撤退したのに「退却」と言わなかった。「退却」と言わないで「転進」という。こんな言葉は、本来ありません。軍が作った誤魔化しです。そんな言葉は今でも、よく使われますね。「深刻」とか、「想定外」とか。普通、「深刻」というのは、時間的余裕があるときに使われるものです。でも、いま問題の原発事故などは、「危険」とか、「危機」と言うべきです。今も昔も、政府は「言葉」で「状況」を誤魔化すので、注意が必要です。さて、ガダルカナル島撤退は「18年2月」ですが、17年10月の時点で、もうダメだと言われていました。17年の秋に、横須賀海兵団の剣道の師範（この人は私の中学の剣道の師でもあります）から、「日本は負けた。ガダルカナルで負けた。お前たち、覚悟するように」というふうに言われました。「間もなく戦場に行くことになるから、死ぬ覚悟をせよ」と。

18年4月には、連合艦隊司令長官が戦死しています。そして5月には、アッツ島（アリューシャン列島の中にあります）の守備隊約3000人が全滅です。9月に、未婚の女子は、国の勤労挺身隊へ動員。10月になると、学徒の徴兵猶予が停止されました。それまで大学生の場合は、24歳まで徴兵が猶予されていました。猶予停止になると、20歳以上であれば、学生であろうと有無を言わず全員兵隊となります。政府は昔からいい加減だから、その時兵隊に取られた数はいまだにわかりませんが、約10万だろうといわれます。一応、理科系の学生は猶予されましたが、文科系は全員でした。僕は18年には大学（予科）一年生で18歳でしたから、この時には引っかかりませんでした。ただ「あと2年だな。2年で死ぬことになるな」と思っていました。10月21日が「学徒出陣」です。東京、神奈川、千葉、埼玉の学生約38000人が神宮外苑に集められました。大規模なセレモニーです。僕はこの時、見送る側にいました。けれど、同じ年の12月に何が起きたか。徴兵年齢が19歳に引き下げられたんです。翌19年、僕は学徒兵として引っ張られました。「あと2年」どころではありませんでした。これに引っかったのは、大正14年生まれと15年生まれです。だから僕は、未青年で兵士にした日本政府に貸しがあると思っています。学徒兵というと、将校だと思っているようすけれども、僕はただの兵隊です。志願をしていれば特甲幹といって、いきなり下士官になれるんです。伍長というと、下から5番目、他にはもうひとつ、特操というの

があります。これは航空兵で、これに志願すると、見習士官になれます。逆に志願をしないやつは、日本軍の伝統で人間とは扱われない。つまり、志願すると有利なわけですが、僕はこの志願した連中を憎みはしません。彼らのすべてが、階級が上になって、楽をしようと思ったわけではありませんから。この昭和18年19年というのは、負ける公算が99%の時なんです。だから志願した者のある一部——大部分だと思いますけれども、少しでも頑張って、停戦あるいは終戦、講和の条件を、いくらかでも有利なものにしようと考えて、志願したのだと思います。そういう人物が、僕の同級生にいました。ですが、僕はそういう志願はしなかった。殺すのは嫌だし、殺されるのも嫌でしたから。その代わり、兵士としてひどい目に遭うことになりました。

『大東亜戦争二伴フ我が人的國力ノ検討』

年表18年の最後に「丙種にも適用」とありますね。徴兵検査は、甲・乙・丙・丁・戊の5段階で、この乙には第1～第3とあります。現役兵というのは、甲と乙だけなんです。それ以外は、体力的な問題で、本来は兵役免除になります。戦争ができるような身体ではないのです。そんな人を兵隊に引っ張るようになったのです。19年の暮に僕は兵隊にされましたが、20年の4月に、大正15年生まれの初年兵が入ってきました。僕の分隊に6人入ってきましたが、1か月もったのは一人もいません。みんなたちまちダウンしました。戦後に確かめたら、ひとりを除いて、戦争が終わって1年かそこらで死んでいます。戦争なんかできっこない人間まで兵隊にする。どうしてそういうことになったのか。戦局が悪化したから無理やりに集めたという訳ではないんです。ここに『大東亜戦争二伴フ我が人的國力ノ検討』という資料があります。「軍機取扱極秘」という判が押してある資料です。

これを見ると、そもそも日本には十分な戦力がないことが分かります。たとえば昭和17年、これは太平洋戦争が始まって間もなくですが、必要な兵力は350万とある。前年16年の兵員数は250万です。17年に350万人だと、100万の増員が必要になる。この350万というのは、日中戦争が始まった昭和12年以降、中国戦線で4年も5年も戦ってきている兵士を含めての350万です。これを昭和18年には250万に減らさなければならないんですが、それはできないんです。資料にはこうあります。「昭和17年ニ於ケル兵力350万ハ作戰上ノ要求ヨリスレハ必スシモ満足シ難カルヘキモ」「現有既教育資源、教育能力ノ現状等ニ鑑ミ概ネ」、350万というのは、極限と推定される。しかし、生産力の確保、人的資源の培養等をなしうる限り、節約し、努力しても、350万を250万に減らすことは不可能、そう書いてある。昭和19年には、理想としては、200万に減らしたい、これも不可能である。20年には150万に減らしたい。そうしないと、国内の生産力、農業や工業に影響が出てくるから。しかし、不可能である。つまり、日本は戦争に負け始めたから、徴兵年齢を19歳まで引き下げたのではないんです。日中戦争を始めてからすでに4年、兵力が足りないのは初めからわかっているのです。そのように、この極秘文書には書いてあります。この資料は、太平洋戦争勃発の翌年1月20日に作られています。この時期は、不意討ちによる連戦連勝の勝ち戦です。その時に、兵力が足りないと言っている。そういう大事なことを政府は国民に絶対に知らせないの

です。今の政府も、重要なことは教えませんが。

「海外放送宣伝記録 昭和17年2月」

この兵力の問題以外にも、絶対に教えないものがありました。ここに「海外放送宣伝記録 昭和17年2月」という部外秘の資料があります。ラジオの短波放送の記録です。日本は当時、短波受信機を持つことを禁止していました。外国に向けてNHKが短波放送をしていたのです。音声は放送されたと同時に消えてしまうものですが、NHKは当時のその放送内容をわざわざ文章化して記録していたんです。そのミスで、僕はこれを入手しているのですが。この記録によると、NHKは次のようなことをアメリカやイギリスに向けて発信しています。「伝えられるところによると、アメリカの政府は砂糖の使用を制限している。一人当たり週12オンスにして、アメリカの国民はみんな困っている。ところが、日本はマレーシアやインドネシア等を占領して、そこから砂糖をもってきたから、砂糖はアメリカ以上に豊富に国民に配給している」。あるいはまた「マレー半島の北から南に攻撃をしていって、最後にシンガポールを占領した。その間、日本はゴムを大量に獲得したから、日本の子どもたちは、ゴム靴の特配を受けて、みんな喜んでいる」。こんな内容です。でも、これは大嘘です。砂糖の特別な配給なんて、あったのは1回か2回です。しかも、1回100gで終わりです。とんでもない嘘です。衣類についてもでたらめを言っています。「アメリカは砂糖以外にも色んな物資が欠乏して、大変なもんだ。日本なんか、綿・ウール、こういうもののストックが大量にあるから、国民が非常に贅沢な暮らしができる。アメリカの国民のみなさん、お気の毒でございます」などと言っています。バカ言っちゃいけません。このころに、純綿なんかありませんでした。ステープル・ファイバー（スフ）といって、人造絹糸を使っていました。これはひどいんです。これで作ったハンカチや手拭いは水を吸わない。洗面器の中に突っ込んでも、吸わないのです。「綿が有り余る」と言いながら、水を吸わないハンカチを使わせる。これが当時の日本の姿です。なのに、放送協会は受信機のない国民は知らないと考えて、嘘八百を言っている。

ちなみに、アメリカの実情はどうかといいますと、ここにあるこれも極秘で、出典は不明ですが、ニューヨーク支店の報告とタイプされています。タイトルは「開戦後の米国の物価および物資」と書いてある。その中に、「鉄鋼」に関する部分で、「鋼鉄の生産量は、アメリカが1か月に生産する量と日本が1年かけて生産する量はイコールである」と記されています。鉄鋼製造量は、まさに12倍の違いです。他にも色々書いてありますが、結論にこうあります。「要するに米国は、物資の点では極めて良態である。海外産地、ことに東亜の資源を失っても、なんとかやりくりができる。蓄積された民間の手持ち物資を動員すれば、戦争遂行に必要な物資は、楽々と調達せられるであろう」。これではとうてい戦いになりません。たとえば終戦の1か月前に、僕らの部隊が受けた命令は、「動くな」です。戦う本土防衛軍第一線の兵隊に対し、「動くな」です。「動くお腹が減るから、動くな。任務のある者以外は、じっとしてろ」。これはもう、戦争もヘチマもないです。それほど馬鹿げた話にならない状態でした。

創価教育学会弾圧の情報

昭和18年について話す時間がだんだん減ってきました。昭和18年に僕は何をやってたか。今から68年前の8月、僕は日本鋼管に動員されて、1週間の勤労奉仕をやりました。そこで、アメリカ軍の捕虜に出会いました。僕はドイツ語クラスで、英語は苦手なのですが、監視の憲兵の目を盗んで、彼らと話しました。彼らが言うには、早ければ12月にアメリカへ帰れるそうなのです。楽しく話していたのですが、そこへ憲兵が飛んできて、捕虜と僕たちに拳銃を突き付けました。捕虜たちは日本の兵隊に比べて、ジェントルマンだったと思います。僕は煙草を吸っていたんですが、彼らは「その煙草を捨てなさい」と言うのです。「なぜ？」と訊くと、「火がついてるまま捨ててくれば、俺たちは拾って吸える」と。僕は「新しいのをやる」と言ったんですが、それを断るのです。彼らが言うには「憲兵に見つかったとき、君たちから貰ったのがバレると、君たちも処分される。しかし君たちが捨てたのなら、拾った私たちだけの責任だ」と。私たちは、「分かった」と言って、捕虜は3人いましたから、煙草を3本捨てました。彼らはそれを拾って喜んでいました。何度もサンキューと言ってました。彼らはどこの出身か知りませんが、日本の粗暴な兵隊とはまったく違いました。彼らのように、他人のことまで考えて行動する兵隊は、日本軍には経験的にまったくいませんでした。残念ながら。

戦争が終わった時、アメリカのある知識人が、「日本人の精神年齢は、12歳である」と言いました。僕は腹を立てて、「何言ってるんだ、アメリカだってたいしたことはない。日本人が12歳ならば、アメリカは13歳かせいぜい15歳くらいだ」と思い、不愉快でした。だけど、前記のNHKの放送記録を読むと、日本人の精神年齢、少なくとも知識人のそれが12歳（小学校卒業の年齢）だったということがよく分かります。だから、腹を立てた僕の方が間違っていたようです。

ちょうどそのころ、牧口・戸田先生が特高に検挙されているのです。この18年というのは、もうどうにもならない状況で、末期的な戦況です。その中で僕も憲兵や特高に捕まったことが、あります。19年の夏には、川崎の工場に動員されたのですが、そこで職場放棄をしたことがあります。仲間は11人で、首謀者は班長だった私ですが、担当の英語の吉武という教員が「学生は純粋だから、曲がったことは認めることができないんで、それで職場放棄になった」というような謝り方をして、僕らは処罰されなかったんです(原因は学徒の特配米を会社がごまかしたことです)。昭和18年以降は、なんでもかんでも、ちょっとでも政府に口応えをすると、しょっ引かれます。牧口・戸田両先生逮捕の1か月くらい後に、僕の父が勤めから帰ってきて、言ったことがあります。私の母親に向かって、「日蓮正宗が弾圧をされたそうだ」と言いました。父は国鉄の職員で、仲間の話から知ったのだと思います。私の母親は、生家が実は日蓮宗のお寺なんです。父は、母親の実家を心配して言ったんですが、母親はその時、「日蓮宗と日蓮正宗は違うから、うちは大丈夫」という返事をしていました。おそらく、当時の拘置所、あるいは刑務所では、両先生はまともに食べさせてもらえなかったと思うんです。逮捕の少しあとの時期ですと、前に述べていたように兵隊ですら、まともに食べるものはありませんでした。食べるものがなくて戦争やるなんというのはもう正気の沙汰ではないです。おそらく刑務所では、まともに食べさせてはくれなか

ったでしょう。当時の兵隊は、主食が日に4合というたてまえました。だけど、僕らは入隊以来日に4合食べたなんていうのは、1回もないです。兵隊でも食料が不十分なのに、ましてや刑務所は、まともには食べさせてもらえなかったでしょう。兵隊が4合という名目であれば、成年男子はどのくらいかと言うと、2合3勺です。兵隊の約半分ですね。しかし実際は、2合3勺も食べていません。兵士に「動くな」という命令が出るくらいですから。こういう状況の中、刑務所で、日に1合ぐらいいは食べさせてくれたのか？ということ、僕は時々考えます。つまり投獄のせいで、牧口先生は早く亡くなったんだ、と思っています。

時間がなくなって余計なことばかりしか申し上げられませんでしたけれども。以上でなんか質問がありますか？

—質疑応答—

——3.11(東日本大震災)以降の原発の報道の仕方と、戦時中の報道がそっくりであることから、これからのメディアの在り方は？

高崎 一言でいえば、「国民の立場に立つてものを言ってるかどうか」ですね。今度出る『第三文明』(2011年9月号)に、『大震災と言葉』というタイトルで原稿を書きましたので、それを読んでもいただければ幸いです。

今日、もうひとつ言っておこうと思っていたのが次の資料です。昭和12年、群馬県の徴兵検査の結果です。昭和12年というのは、日中戦争が始まった年ですね。その年の群馬県の徴兵検査の結果として、〇〇村で、甲種合格が〇名、乙が〇名という情報を書いてあります。僕が言いたいのは、「日本の若者は決して戦争なんか好んでいなかった」ということです。12年の7月7日に、日中全面戦争が始まるんですが、その昭和12年度の徴兵検査で、群馬県内の逃亡・所在不明者は135人もいました。これには参考までに全国統計が出ていますが、昭和12年の全国の逃亡・所在不明は10280人。約1万人が逃亡・所在不明なんです。だから、戦前の日本の若者は決して好戦的ではありません。太平洋戦争中、「撃ちてし止まん」とか、「日本は神国」だとか言われて、若者が戦争に引っ張り出されましたけれども、喜んで行った若者っていうのは、1%くらいはいると思いますけども、ほとんどは決して好戦的ではなかった。この逃亡・所在不明者の資料は、終戦後に誰かが勝手に作ったものなんかではなく、群馬県徴兵検査の担当者が作ったものです。1万人の逃亡・所在不明者の存在は、日本の若者は決して捨てたもんじゃない、と僕に思わせてくれます。

——戦争を知っている人が減ってきた中で、今の学生に望まれること、今のうちに経験しておいてほしいことは？

高崎 若い人が引っ張り込まれてしまうのは、物質的な豊かさに迷わされるということですね。豊かに楽しく人生を送りたい、というふうに欲望のみを考えるのは危険だから、もっと慎重に、物質的な豊かさ以上に、精神の豊かさを身に着けないとだめだと思う。例えばこの大震災でも、

物質的な豊かさというものが非常に儚いものだということが分かったと思います。古くは、鴨長明の『方丈記』にも書かれていますね。物質ばかりに気をとられていると、ある時大変などん底に叩き落される、人生にはそういう危険がつきものです。それを乗り越えるためにはね、精神的な豊かさを目指して、人生を生きることだというふうに思います。

——高崎先生が中学校4年生の頃に、5つの予測を立てて、4つが当たったということで、どうしてそんなに若い時に明晰に判断できたのか。また若いころどんな勉強をして、どんなことに興味があったのか。

高崎 雑誌は「中央公論」「文芸春秋」をほとんど毎月読んでいました。「改造」が読みたかったんですが、何かが書いてあるのかむずかしくて分かりませんでした。また中学の一年生のころから、さっき触れた『フレッシュマン』（英語通信社発行）という月刊の教養雑誌を読んでました。

実は、生まれたのが横浜駅の近くで、通船の発着場が目の前にありましたから、外国人が自然な存在でした。大人の友達と思ってるんですね。黒人も白人も、また中国人も。彼らは通船の時間を待つ時、私を相手にいろんな片言の日本語で話しかけてくれました。そういうのがあって、私が一番先に覚えた外国の歌は、イギリスの国歌でした。さっき言いませんでしたけども、戦争が始まった時に、僕が「やだなあ」と思ったのが、小学校に上がる前（あるいは一年生）の子どもだった僕に、イギリスの国歌を教えてくれた、イギリスの若い船員が敵になってしまうことでした。彼は、海軍の軍艦に乗って、僕が兵隊になれば、お互いに顔がわからないまま、大砲を撃ち合って、僕が死ぬか、イギリス国歌を教えてくれたあの青年が死ぬか、どちらかが死ぬであろうと。12月8日に真っ先に思ったことはそれなんです。そのころの夢は、船乗りになって、世界中の国を回って、いろんな国の人と知り合い話をし、さまざまな国の風俗習慣を学びたい、というものでした。ところが太平洋戦争が始まって、その夢がぶちこわしになった。僕が海軍学校と言われる中学へ進んだのは、船員になるためでした。県内に商船学校はないので、海軍学校へ行けば、ヨットがある、カッターがある、プールがある、船乗りに必要なことを教えてくれる、という理由で選んだんです。軍人になるためではありませんでした。

質問の答えに戻ると、そういう環境に生まれ育ったことと、それから雑誌が好きで、「潮」とか「第三文明」はいまも毎月読んでいますが、中学生の頃に大人の総合雑誌を読んでいたというようなことから（級友の大部分は横須賀生まれで私とは環境が全く違っていました）、仲間の同級生とは考え方が違っていたと思います。それは軍港と商港の差異と言えばわかりやすいでしょう。また、戦後復学して片岡良一という師に文学を習ったことも重大な要素ですが、片岡学と呼ばれる学問について述べると、少くとも一時間ぐらいは必要なので省略します。

——資料の中で、創立者が本当の意味での正義を期待しているとある。正義は悪を生み出してしまふ危険があると思うが、本当の正義とは？ また、今までの研究を通し国家権力の真実をあばいていく中でのご苦労は？

高崎 自分の身を守るためには、権力に立ち向かわない方が安全です。だから権力に立ち向かう時には、覚悟しなければならない。食べていけない、ということになる。権力というのはものすごく恐ろしい存在ですから、それなりの覚悟をしなければならない。その時に、できれば自分ひとりで戦うんじゃなく、個人の力っていうのは限界がありますから、自分の希望や自分の思想、意志をわかってくれる交友関係、仲間を作っておくべきです。孤立無援で戦ったら、いっぺんに跳ね飛ばされてしまいます。いかに正義と思っても、明らかに危険な行動はやはり避けて、仲間と考え方を、希望を、いつも確かめ合っていけるようにしないと、権力に対する抵抗は難しいです。

正義という観念は、僕にとっては、小学校から中学校にかけての子どもの頃のたったひとつの価値観だったんです。相手が誰であれ、不義不正に対しては批判しなければいけないと思い、誰に向かっても信じることを言ってきました。これは言わない方がいいなって思ったことでも、それを言ったために、やがてはいわゆる出世コースから外れてしまったようです。人生の分かれ道に出会った時そのたびに、これを選んだら不利になると知っていても、正しいことは貫かなければならないということで、不利になる方ばかりを選んできました。正義を貫くということは、そういう倫理でもある。世俗的な利益のためには、これは止めておこうというのが、一般の生き方だろうと思いますが、本当の意味で正義を貫こうとすれば、不利になることを覚悟してやるという信念が大事です。牧口・戸田両先生はその道を選んだと僕は思います。だからさっき、ちょっと言いましたように、軍隊に引っ張られたときに、仲間はみんな、特甲幹か特操か海軍予備学生かに志願したけれど、僕はしなかった。しないと、最下級の兵士です。その間、何十回も殴られ、蹴飛ばされる。いきなり見習士官になれば、何度かは殴られるだろうけれど、星ひとつの最下級兵士よりははるかに楽だ。それはよくわかっている。よくわかっているけれども、人を殺すのはいやだ、殺されるのもいやだとすると、志願できませんでした。帝国軍隊は、殴られるようにできています。ひとつ例を挙げます。夜、星3つの兵隊が「初年兵集まれ。今晚風呂に行ったものはこっち、行かないものはこっちに立て」と言う。僕はその日、風呂に行っていないのでした。新入りが風呂に入るのは生意気だ、と言って殴られると思いましたので。そのとき古参兵は、「行ってないやつはあれだけいるんだ。お前たち、星がひとつくらいで風呂に行くなんて。風呂なんか、星3つくらいになったら行くもんだ」と言って、風呂に入った仲間を殴りました。僕は、「行かないでよかった」と思いました。けれど、今度はこっちに向かって、「向こうを見ろ。風呂に行った者があれだけいる。お前たち、もたもたやってるから風呂へ行く時間がなくなるんだ。たるんでる!」と言って、こちらも殴られました。つまり、風呂に行っても行かなくても殴られるようにできている。帝国軍隊というのはそういうところなんです。僕は、大正時代のシベリア出兵のときに現役兵だった父から軍隊のことはよく聞いて知っていました。「志願しないと、星ひとつはつらい」と、分かっていたんですが、志願しなかった。これはやはりね、ひとつの正義観による抵抗だと思っています。自分の考える正義を貫くと、そういう結果になります。これは日本の軍隊だけではなく、一般社会でもそうです。他にも例えば、常勤と非常勤の別があります。僕

は、高校の専任の教員でしたが、専任を13年間やったあと、非常勤に変わりました。非常勤に変わると、給料は半分以上に減ります。それを知っていて、非常勤に変わりました。時間が欲しかったからです。資料探して、読んで、「あの戦争は何だったのか？ 日本という国は何なのだ？」ということを知るために、非常勤に変わりました。誰かがやらなければならない、誰もやらないのなら、俺が一人でやる。それが正しいと思って、僕は決断しました。人生には、何回も分かれ道があり、社会的生活的に不利な方、不利な方を選んできました。たぶん私はあと数年で死ぬだろうと思いますが、後悔はありません。人間としてやらなければならないことをやってきたと思っています。

——正しい情報をどのように選んでいくか、何を基準にしたらいいのかというのをつかまれた理由は何？

高崎 最後に決めるのは自分です。Aという人はこう言った、Bという人はこう言った、ある新聞にはこう書いてある、それらを総合して、一番妥当なものを決めます。決めるのは自分です。だから判断できるだけの自分の知識、智慧、そういうものを日常的に育てていかなきゃだめですね。

——①なぜ日本軍は下の者を殴るのか。②組織が上から腐っていった原因は。③御前会議など、なぜ精神年齢が12歳と言われるほどの内容になったのか。

高崎 ③第一に、アメリカを相手に戦うこと自体がおかしいのです。どんなに精神的に頑張っても、戦争は、武器、弾薬がなければできません。経済的に非常に豊かな国でなければ、戦えません。日本軍主力の歩兵が持っていた三八式歩兵銃（明治38年制式採用）というのは、弾を5発、いっぺんに押し込みます。押し込んでから槓杆（レバー）を引いて、薬室に弾を送り込み、引き金を引きます。1発ずつ、1回ずつ操作します。これが日本の武器レベルです。ところがアメリカには、マシンガンという携帯用の機関短銃（トミー・ガン）があって、引き金を一度ひけば、弾が30発ぐらいバババツと連続して出ます。こういう武器を持った相手に対して、貧弱な前近代の武器で戦争をやるなんて、自殺行為です。それを平気で、国家を代表する者が、国民の生命・財産を担う者が、宣戦布告してしまう。僕にはとうていそれは正気の沙汰とは思えない。御前会議の決定的錯誤はそこだと思います。

①については、自分の命令を聞かせる訓練ですね。どんな命令にも従わせる訓練です。だから、なんでもかんでも暴力で押さえつけるんです。理屈、理由なんか何もなくてもいいんですよ。理由などなにもなくても、殴ろうと思えばなんでもできる。たとえば、起床ラッパが鳴って、点呼に整列をする。集団であれば、誰かがビリになりますよね。そのビリを営庭の松に登らせ、下から物干し竿で引っ叩く。そしてなんて言うか。「蟬は殴られれば逃げるんだ。逃げる。」っていうんです。これは友人の話で私の経験ではありませんが、そういう軍隊があるんです。

ただ、これだけは忘れないでほしいことがあります。今の自衛隊は、僕は軍隊だと思ってます

けども、自衛隊が僕らのころの野蛮な帝国軍隊とは違う面を持っている本質的な理由は、志願制度だからです。僕らのころは義務です。だから僕が一番心配するのは徴兵制度の復活です。肯定するつもりはありませんが、今の自衛隊のように志願制度ならば、まだましです。だけどこれが義務による徴兵となったら、昔の帝国軍隊と同じ軍隊生活を送ることになります。それを僕は一番心配しています。もう少し、エピソードを話しましょう。重機関銃でグラマン戦闘機と戦うには、高射脚に付け替え照準器を対空照準器に替える必要があります。けれど、そういう対空戦闘の訓練を受けたことは1回もありません。「この照準器はどうやってつけるんですか」と聞いたら、古参の下士官は「貴様は学徒だろ。学生というものは頭がいいもんだ。そんなことは自分で考えろ」と蹴飛ばされました。実際は、古参の下士もたぶん知らなかったのでしょう。次に困ったのが、グラマンに対して、どのタイミングで引き金を引けばいいのか分からない。結局、「横切るグラマンを撃つな。攻撃してくる敵だけ撃て」ということにしました。徴兵制度だから、こうなるのです。僕は高校の専任教員を辞めるとき、生徒に向かって、「君らは大丈夫だ。君らの子どももたぶん大丈夫だ。しかし君らの孫は、徴兵制度が復活しているかもしれない。その覚悟はしておきなさい」と言って、別れました。

②は、まあ俗な言い方をすれば支配欲に目がくらんだんですね。正常な判断ができなくて、ばかげた戦争を始めた。中学の時に、人文地理の先生でしたが、巡洋艦の元艦長が、開戦の10日か15日くらい前に言ったことがあります。「奇襲攻撃をかければ、その時だけは勝つ」と。「あとはだめだ」と。これが、巡洋艦の艦長の言葉です（平山という大佐でした）。私が海軍学校と呼ばれる学校に入ったのが良かったのかどうかはわかりませんが、戦争とか軍隊とかについては、学ばせてもらったと思っています。ただ、苦しめられたことも大いにあります。

——戦時下文学の研究をされるなかで、もうこれ以上やれないのではないかという壁や、苦しいことを乗り越えることができた原因や思いは？

高崎 諦めないことですね。どんな障害にぶつかっても絶対に諦めない。

僕が作家の中で一番尊敬しているのは、里村欣三という、戦前戦中の創価教育学会の会員です。その里村を20年も30年も研究していますが、たった一人でやるから分からないことだらけなんです。これまでの一番の難問は、昭和18年の秋に出版された彼の代表作『河の民』のある部分についてでした。この作品の中に、現地の警察署長のことが少し書いてあります。その署長は、夜が明けた時にお題目を唱える。それを里村本人は、珍しいものを見るもんだというふうに驚いた表情、気持ちで眺めます。そして、その感想は、「たぶんこの警察署長は、危険な仕事をやってるから、お題目を唱えるようになったんだな」というのです。これだけで終わり。創価教育学会の会員である人間が、「警察署長は危険な仕事だからお題目を唱えるんだな」で終わらせるというのは、不思議ですよ。非常に不思議。里村は日蓮正宗の信者でもなければ、創価教育学会の会員でもないのかと疑いました。法華經に多少の理解があるという程度だったのか？という疑問にぶつかって、困りました。それはどうしても解けない。ところが、「ああ、これだ」というふうに気

づいたことがありました。それは単純なことで、昭和18年7月の、創価教育学会弾圧です。『河の民』は、そのあとに出ているのです。であれば、そのときに「俺は創価教育学会の会員だ」なんて書けるはずがない。だから、ああいう書き方になった。5年も10年もかけて、状況を知らない私はやっと納得しました。里村の作品には多くの単行本があり、『河の民』は彼の代表作です。一番いい作品です。かつ、戦時下の南方を題材にした従軍作家たちの作品群の中でもナンバーワンです。とにかく、彼は普通の作家と違うのです。サンダカンの日本軍警備隊が、「ボルネオの奥地を探検するならば、武器を持っていけ。丸腰で行くのは許可しない」と言うのに対し、「ああそうですか。じゃあ持っていきましょう」と言いつつ、軍刀と拳銃を荷物の中へしまいこんで、「帰ってくるまで預かってくれ」と宿舎に預けて、武器を何にも持たないで、日本人未踏のボルネオの奥地に入っていく。彼は、日本軍の軍属としてでなく、単なる旅行者として、その人と付き合いなかったのも、警備隊幹部を欺き、拳銃1つ持っていかなかった。こういう人間なんです。当時、軍の命令でボルネオを探検するのに、「武器なんかいらない、俺はただの旅行者だ」と、そんなことを作品に書くだけでもすごく勇気がある危険なことです。里村は創価教育学会の会員です。当時の会員の作家は2、3人しかいません。『河の民』はいま中央公論の文庫に入っていますから。それを読んでいただければ、「あの戦争中によくこれだけのことを書いた」と驚くでしょう。そして、僕が言っていることが無意味というか、いい加減なことではないということが分かってもらえるんじゃないかと思います。さらに、その里村がいまなぜ無視されたり軽視されたりしなければならぬのか、ということについて考えていただきたいと思います。

—補遺—

ここに一冊の小冊子があります。『教育関係に於ける左傾思想運動』と題する文部省学生部が昭和8年3月に発行したもので、表紙の裏面には「取扱については特に注意せられんことを望む」と記され、無原則に一般の目にはふれないようにせよということになっています。

昭和8年3月といえば創価教育学会が設立されてから2年半ほど経た時点であり、この国の左翼運動の昂揚が弾圧によって終末に向いかけていた時期です。また別の視点から言うと、あの悪名高い「サクラ読本」による新たな教育方針が、教育の場で具体的に動き始めた、いわばその初年度ということでもあります。

ところでこの小冊子には「左傾の原因」という項目があり、当時の学校教育ないしは青少年の置かれている現実がかなり具体的に記されています。たとえば当局は「左傾」の原因として「教育の欠陥」を挙げているのですが、項目の中のいくつかを列挙すれば次のようです。

- 人生観社会観に関する教育の不十分
- 創造力及び批判力の涵養に関する教育の不十分
- 情操・意志の陶冶の不十分
- 教師の教育者としての自覚ならびに識見及び修養の不十分（その他6項目）

等々ですが、すべてこれらは教育の問題であるわけです。

ところが、文部当局の述べる対応策は、左翼運動の嚴重な取締りと国家主義教育の徹底という2点に絞られ、自らの責任についてはひと言も言及していないのです。

いや、そのこと以前に右に抽出した4つの項目の一体どこが「左傾」と関係するのかという点が問題だと思われたいのです。つまり、教育（または教育者）の「不十分」を「十分」にさえすれば「左傾の原因」を防げるというのかどうか、私に言わせば、これらは「左傾」に直接結びつくものではないと思われたいのです。「左傾」は政治や経済の矛盾・欠陥や社会制度上の差別等々が問題であるのは言うまでもないでしょう。にもかかわらず、文部当局はなにを考えているのか、「大日本帝国」が抱える本質的な欠陥や矛盾を解決しようとする意図はどこにもなく、逆に「神国日本」や「八紘一宇」などという虚構の大義を宣伝し、それを国民に押しつける方向に暴走し始めたわけです。（八紘一宇という世界支配の思想を押し出したのはもう2、3年後のことですが）この国がなんのためにどういう方向に進もうとしているかは、前記の「サクラ読本」と、それまでの旧教科書を比較すれば容易に理解できますが、「サクラ読本」という徹底的な軍国主義教科書については、もしいつかその機会があればお話ししたいと思います。

戦前・戦中の創価教育はそれと真向うから戦う精神ですから、帝国主義教育と命をかけて対立することになります。この小冊子が刊行され配布をされた10年後、それは遂に狂暴な弾圧として学会に押しかぶさってきました。その間の10年という時間は日中全面戦争から太平洋戦争にかけての間です。

以上について、予定としては話すつもりでしたが、私の不手際によって時間を失ってしまいました。補遺としてここに書き加えます。

また、里村欣三については「創価教育」第三号を併読して下されば幸甚です。